

次の文章を読み、あとの問1～問5の問いに答えなさい。

コンクールで他の出場者との圧倒的な力の差を感じた陽菜は、フルートが吹けなくなってしまった。しばらく姉の亜季が住む奥瀬見で過ごすことにしたが、そこでオルガン制作職人である芦原さんと、その娘の朋子に出会い、パイプオルガン制作を手伝うようになった。

「フルート、やめるんだって？」

亜季姉から聞いたのだろう。答めるような口調だった。

「やめるなんて言っていないよ。ちよつと、迷ってるだけ」

「オルガンを作り終えたらフルートに戻るって、陽菜、言ってた。あれは嘘だったの？」

「でも、オルガン、まだ作り終えてないじゃん」

「ごまかさないでよ。陽菜、^(注1)オルガンビルダーになるつもり？」

返事ができない私を、朋子は黙って見つめてくる。上空を吹く風が、こつとひときわ派手な音を立てた。

「さっき吹いてた曲、あれ、コンクールでやった曲だよな？」

「聴いてたの？ ていうか、よく覚えてるね」

「あのコンクールは、衝撃的だったから。私と同じ年くらいの人たちが、華やかな舞台に立ってて、^(注2)鎬を削ってる。オルガンビルダーには同世代の仲間とかいないから、すごく羨ましかった」

「入賞した三人のことは覚えてる？ 私とはレベルの違う演奏だったよ

ね」

「私はフルートのことはよく判らない。みんな同じくらい、素晴らしかったと思う。だから私は、陽菜がなんでフルートをやめようとしてるのか判らない」

——みんな同じくらい、素晴らしくなんかない。

朋子は、私と三人の狭間にあつた確かな断絶を、聞き分けられていない。だから、そんなことが言えるんだ。

「陽菜は、フルートをやったほうがいいよ。やめないほうがいい」

「私は、オルガンが向いてると思ってる」

亜季姉にも言えなかったことが、^Aすつと出てきた。

「私には、個性がないんだよ。好きな演奏がたくさんあって、好きな音がたくさんあって、自分の演奏はこれだってものがないんだ。フルート奏者はそれじゃ許されない」

「なら、探せばいい。自分の強い個性を」

「それを、オルガンで見つけられたと思ってる。オルガンは演奏するにしても、作るにしても、強い個性を持った^(注3)ストッパたちを組み合わせせていく作業だよな。私にはそういう作業のほうが向いてる。フルートよりオルガンのほうが向いてる」

^B自分でも止められないほどに、言葉が^(注4)ヒートアップしていく。

「朋子と一緒に^(注5)整音をしたのは、すごくやりがいがあった。私がやるべき仕事はこつちなんだって、そう思ったよ。オルガンを弾いたり作

つたりする仕事こそが、私にとって……」

「私は、自分がオルガンに向いてるかなんて、考えたことがない」

朋子の声は、困惑していた。

「自分に向いてるか向いてないかなんて、どうでもいい。私にはオルガン作りしかなかった。だから、オルガンを作ってる」

「やろうとすることが向いてるか向いてないか、普通は考えるでしょ？」

「父だって別に、向いてるからオルガンビルダーになったわけじゃない。オルガンが何よりも好きだったただけだよ」

朋子が足を止めた。

上空を吹き荒れている風が、地上にも降りてきている。この二ヶ月間、私を包み込んでくれていた奥瀬見の自然が、わずかに牙を剥いて^むいる感じがする。

「陽菜は、本当は何になりたいの？」

「何に——」

「コンクールで一位を取りたかったんじゃないの？ 音大に行きたかったんじゃないの？ フルート奏者として、スポットライトを浴びたかったんじゃないの？」

「でもそれは、私には向いてないんだよ」

「そんな話はしてない。ごまかさないで」

朋子は、強い人だ。子供のころからぶれずに、一貫してオルガンビル

ダーの道を歩んでいる。自分の技術を高め、十九歳にして周囲の大人を驚嘆させるほどの技術を誇っている。

「私は朋子みたいに、生きられない」

朋子はじつと、私を見つめている。

「フルート奏者になりたいよ。でも、それは私には、無理なんだ」

私には、私のフルートが、ないのだから。

朋子の目の中には、落胆も怒りもない。パイプの凹凸を丁寧に確認するような、冷静な色だけをたたえている。でも、これが私^Dなのだ。自分を晒^{さら}すつもりで、私は朋子の視線を浴び続ける。

ふと、背後に人の気配を感じた。

「芦原さん——」

いつからそこにいたのだろう。振り返ると、そこに、芦原さんが立っていた。

「こんなことになるとは、思っていませんでした」

芦原さんは、残念そうに言った。

「今回のオルガンは、街ぐるみで作ろうと思っていました。僕にはない発想、僕にはない感性、そういうものを統合して、新しいオルガンを作るためです。だからあなたを誘ったのです。あなたにとっても、オルガン制作をフルートに活^いかしてももらえると思った。お互いにより影響があるはずだったのに——」

「私は、いい影響だったと思ってます」

「僕はオルガンビルダーになりたがる人をたくさん見てきました。そのほとんどが志半ばで潰れます。儲^{もう}からないですし、重労働です。心理的な負荷も高い。僕は還暦を迎えています、この仕事をはじめてから三十年以上、ずっと自分の無力さに打ちのめされています。向いてようがいまいが、大半は潰れる世界です」

「じゃあ 芦原^Eさんはなぜ、オルガンビルダーを続けられているんですか」

(逸木裕『風を彩る怪物』による。)

(注1) オルガンビルダー＝オルガン制作をする職人。

(注2) 鎬^こを削^けつてゐる＝「鎬を削る」は、激しく争うこと。

(注3) ストップ＝オルガンの音色のこと。どの音色を鳴らすのか選択するシステムのことを指す場合もある。

(注4) ヒートアップ＝激しくなること。

(注5) 整音＝演奏の目的にあった状態にオルガンを調整し、音色を作っていくこと。

問1 文章中に ^A すつと出てきた、^B 自分でも止められないほどにと

あるが、これは陽菜のどのような様子を伝えているか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア これまで閉じ込めてきた思いが言葉となって発せられることに、自分自身戸惑いつつも、興奮を抑えきれないでいる様子。

イ 朋子に問いかけられたことで、ようやく秘密を打ち明けることができ、開放的な気分になり、喜びに満たされている様子。

ウ これまで我慢して口を閉ざしてきたが、勇気をふりしぼって自分の考えを述べることに、あらゆる力をそそいでいる様子。

エ 朋子の率直な問いかけに、自分の中にあつたこだわりが薄れ、素直に心の内を話そうと決意して、必死に言葉を探す様子。

問2 文章中に ^C 私は朋子みたいに、生きられない とあるが、陽菜と

朋子の考え方の違いを説明した、次の文章を完成させなさい。ただし、^I は七字以内で書き、^{II} は文章中の言葉を使って、八

字以内で書きなさい。

陽菜の進路に対して、陽菜自身は、コンクールに入賞できなかったこともあり、個性がないことを ^I ことによって自覚し、向き不向きを考えて進路を決めようとしている。一方、朋子は、何が好きであるのかや ^{II} を重視している。

問3 文章中に、これが私^D とあるが、その「私」の説明として最も適

当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 周囲の高度な技術力に衝撃を受け、意欲を失い、将来に対して無気力な状態の私。

イ 周囲の期待に応えられず、自信を失い、音楽に関することから離れようとする私。

ウ 周囲の迫力ある演奏に驚嘆し、意欲を失い、自分の才能を生かすに
きれずにいる私。

エ 周囲の才能に圧倒され、自信を失い、自分の信念を貫くことがで
きないでいる私。

問4 文章中に、^E 芦原さんはなぜ、オルガンビルダーを続けられている

んですか とあるが、このときの陽菜の心情を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア たとえ才能がなくても、音楽に関わっていたという自分の思いを少しも理解しようとしてくれないことに、いらだっている。

イ ようやく向いていることを見つけ、新たな道に進む気持ちになったのに、それをくじくような事実を告げられ、当惑している。

ウ 自分の未熟さを認め、前向きに今できることを探して行動しているのに、経済的な面だけ心配され、プライドが傷ついている。

エ 奥瀬見で過ごしてきた日々について、肯定的にとらえようと努力している自分を、真っ向から否定され、怒りがこみ上げている。

問5 次は、この文章を読んだあとに、森さんと原さんが表現の効果に

ついて話し合っている場面の一部です。これを読み、あとの(a)～(c)の問いに答えなさい。

森さん 私は、風の描写が印象に残ったな。最初は **I** 風が、

次には **II** と表現されることで、緊迫感が増したよ。こ

こは陽菜と朋子の考え方の違いが明らかになる場面だか

ら、会話の雰囲気になったりだ。

原さん そうね。私は、「私を包み込んでくれていた奥瀬見の自然が、わずかに牙を剥いている感じがする」が気になったわ。

「感じがする」わけだから、あくまで陽菜の主観のだけれど、だからこそ、この感覚の変化は陽菜の状況の変化と深い関係にあると思うわ。

森さん そうか。これまで自分をⅢもどった奥瀬見の自然が、陽菜にとって違う意味を持ち始めたわけだね。

(a) Ⅰ、Ⅱに入る言葉を、文章中からⅠは五字で、Ⅱは十一字で、それぞれ抜き出して書きなさい。

(b) Ⅲに入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 激励する イ 誘導する ウ 保護する エ 隠蔽する

(c) 次は、森さんと原さんが感覚の変化は陽菜の状況の変化と深い関係にあるについて、考えをまとめた表です。

言葉を、	Ⅹ	は三十字以上、四十字以内で、	ⅶ	は漢字二字で
------	---	----------------	---	--------

書きなさい。

〔奥瀬見から受ける陽菜の感覚と状況との関係〕

陽菜の感覚	陽菜の状況
奥瀬見が包み込んでくれた。 奥瀬見が牙を剥いている。	奥瀬見でオルガン制作の魅力を知り、やりがいを感じ始めた。 Ⅹ ことを示しているようで、奥瀬見にⅶ されている気分になる。

Y

問 1 (ア)

問 2 I (例) 他人と比較する

II (例) 何になりたいのか

問 3 (エ)

問 4 (イ)

問 5 (a) I 上空を吹く

II 地上にも降りてきている

(b) (ウ)

(c) X (例) フルート奏者が無理だからオルガンビル
ダーを忘すことは、自分の弱さから逃げている

Y (例) 非難

(備考) 問 2 I、II は同趣旨ならば正解とする。

問 5 (c) X 同趣旨ならば正解とする。部分点を与えてもよい。

問 5 (c) Y 同趣旨ならば正解とする。

【解説】

問2

陽菜と朋子の考え方の違いは、「私には、個性がないんだよ」「オルガンのほうが向いてる」や「向いてるかなんて、考えたことがない」「オルガンが何よりも好きだった」「本当は何になりたいの？」などの言葉から読み取れる。説明文の空欄の前後の文言に着目しながらうまく続くように言葉をまとめる。空欄Ⅰでは、陽菜に「個性がない」ことを自覚させたものが入るが、コンクールで入賞できなかった陽菜は、入賞した他の三人と比較することによって、「私には、個性がないんだよ」と言っている。よって、自覚したのは、入賞した他の三人と比較したことによるので、これを指定字数内でまとめる。空欄Ⅱには、朋子の考え方が入る。朋子が、向き不向きよりも好きであることと同時に重視しているものは何かを考える。「本当は何になりたいの？」という朋子の質問に注目する。

問4

「こんなことになるとは、思っていませんでした」と残念そうに言う芦原さんと、「いい影響だった」と言う陽菜の気持ちにずれが生じている場面である。芦原さんは、新しいオルガン制作に陽菜のもつ発想、感性を活かすために陽菜を誘っただけで、オルガンビルダーになることを求めているのではない。一方、陽菜は「フルート奏者になりたいよ。でも、それは私には、無理なんだ」というように、自分には「個性」がないと感じており、「オルガンを弾いたり作ったりする仕事」に「やりがい」を見つけ、この「仕事こそが」とまで思い始めていた。ところが、芦原さんに、オルガンビルダーをめざす人は「ほとんどが志半ばで潰れます」、オルガン制作の世界は「大半は潰れる世界です」と、その思いをくじかれるようなことを言われて戸惑ったのである。よって、イが適切。

問5

ポイント

(a)この文章中で「風の描写」がある部分は、「上空を吹く風が、ごうつとひとときわ派手な音を立てた」と、「上空を吹き荒れている風が、地上にも降りてきている」である。風の情景描写が二人の考えがぶつかり合う緊迫した心理状態を表す場面である。空欄前後の言葉に着目しながら、それぞれ指定字数に合わせて抜き出す。(b)「私を包み込んでくれていた奥瀬見の自然が、わずかに牙を剥いている感じがする」という場面は、フルート奏者になるのをあきらめてオルガンビルダーをめざそうとしている陽菜の思いが否定されそうになっている場面である。それまでは、奥瀬見の自然は「私を包み込んでくれていた」ので、この状況としては、ウが適切。(c)フルートが吹けなくなり、オルガン作りにやりがいを見い出しかけていた陽菜の気持ちの変化を、奥瀬見から受ける感覚の変化で読み取る。オルガンビルダーの朋子は、「子供のころからぶれずに、一貫してオルガンビルダーの道を歩んでいる」。それを見て、陽菜は「朋子は、強い人だ」と思っている。一方、陽菜は、個性がないと自覚してフルート奏者になるのをあきらめオルガンビルダーをめざそうとしている。この一貫性のない自分に対して奥瀬見が「牙を剥いている」と感じたのは、非難や抗議をされていると受け止めたからである。空欄Ⅹには、陽菜の状況をまとめて書く。